

いしかり 簪

- 石狩市と巖谷小波高瀬 たみ... 1
- 生振に残る茅葺（かやぶき）屋根の家吉田 隆義... 4
- 石狩市右岸地域の農村電化設備の経緯小川 茂... 6
- 石狩町右岸地域の国、道の貸付牛導入の経緯小川 茂... 8
- 北海道昔々（一）吉野 惣栄... 9
- 石狩浜漁師天気予報あれこれ吉岡 玉吉... 11

第 15 号

石 狩 市 郷 土 研 究 会

石狩市と巖谷小波

高瀬 たみ

石狩市の「了恵寺百年記念宝蔵館」で、所蔵品の目録作りに係わっていることから多くの貴重な史料に出会います。そのなかに、巖谷小波（1870・1933）が本道の景勝地で知られる神居古潭と大沼を詠んだ句の屏風がありました。

巖谷小波は、安政年間創立といわれる石狩市の俳句結社「石狩尚古社」の選者でした。そのようなことから石狩の俳句関係史料を展示している中島家の「尚古資料館」には、小波の句三点と小波選の句帖等が残されています。そのうちの一点は、小波が石狩に来て石狩川を詠んだ句です。しかし、いつ石狩を訪れて詠んだのか明確ではありません。そこで、石狩市の俳句作品を紹介し、併せて、北海道各地を巡回講演した小波の足跡を訪ねてみたいと思います。

小波は40歳ころから、「お伽口演」と称して日本各地はもとより樺太・台湾・朝鮮などを巡回講演しました。『近代文学研究叢書35』（昭和47年）によると、その回数は510回（明治41年4月～昭和8年6月）に及ぶとなっています。そこで、父一六の出身地滋賀県にある水口町立歴史民俗資料館内の「巖谷一六・小波記念室」に問い合わせたところ、巡講地域の日程の詳細は分からないとのことでした。北海道にも度々訪れたといわれていることから、『北海道

俳句誌』・『北海道文学全集 別巻』・『おとぎばなし』をつくった巖谷小波』・東京南桐吟社の俳誌『南桐』・『北海道文学大辞典』・『岩内町史』などから来道した年を調べてみますと、大正2年・4年・7年・8年・10年・12年・昭和4年と7回を数えます。場所は、函館・大沼・小樽・札幌・岩見沢・定山溪・古平・余市・岩内・旭川などでした。うち函館市・小樽市・旭川市の各文学館と、岩内町郷土館に何うとともに調べたところ、函館五稜郭公園・上磯町渡島当別・七飯町大沼公園中の島に句碑があり、いずれも大正時代に建立されたものです。また、俳誌『南桐』には、小波手記の紀行文と句が所収されていることが判りました。

岩内町の郷土史家の森柳司氏によりますと大正10年10月発行の『南桐』には、岩内を詠んだ句が5点・小樽が3点・湯の川が1点・大沼公園句碑建立に際して」と題した句が3点、掲載されているとのことでした。

上記の「巖谷一六・小波記念室」のお話では、小波は巡回講演の傍ら、自ら各地域の俳人が催す句会に招かれて詠み、求めに応じて揮毫した数は膨大とのことでした。それは岩内での紀行文「岩内だより」（『南桐』所収）からも理解できます。

こうしてみますと、北海道でも巡回先の各地などには意外と多くの句が残されているのではと思います。しかし、『旭川と俳人』の著者深谷雄大氏によりますと旭川では確認されていないとのことでした。そこで了恵寺記念館所蔵の句作品を、同寺の許可を頂きここに記載します。俳句は、屏風（紙本131×62）に表装されていま

す。

(*写真参照)

(前書き) 薄暮神居古潭

山暮れて幾瀬に秋の光かな 小波

(前書き) 月下大沼を過ぎて

月の沼神秘の山を浮かへたり 小波

「尚古資料館」所蔵の作品(軸装、紙本136×33)

秋の川幾代の木々も浮はしむ 小波

この句は、石狩町を訪れた小波が秋の石狩川の流木を詠んだ句です。

尚古社のことを詳しく書いた『鎌田池菱と尚古社・中島家資料にみる石狩俳壇と各地の俳人たち』(平成7年、石狩町郷土研究会発行)によると、巖谷小波は明治後期、大正期、昭和前期の尚古社員作品の選者の一人でした。

この句に詠まれた流木とは、石狩川河畔に生えていたヤチダモ・クルミ・ナラ・クワ・ヤナギなどの老木や若木などが大雨や洪水による決壊で流失、濁流とともに河口のまち石狩に流れてきたものです。流木は、石狩川の治水(築堤や護岸整備)が進んだ現在にはあまり見られなくなりましたが、昭和40年代まで石狩川河口の本町と八幡町市街の住民の燃料となっていました。昭和36、7年の写真を見ると、水害の後に川に入って燃料にする流木を拾う人たちが大勢写っています。前記の小波の俳句は、当時の石狩川の様子を偲ば

せる貴重な作品といえます。

他に、尚古社員の句を選じた小波筆の句帖が現在1冊残されています。東京に送った句集稿から選をした36丁になる句帖で、追加として、最終帖に小波の句が記してあります。

諫言の間は静かなり花の宴 楽天居選

名月や桜も人のうしろ向き 楽天居選

明治32年発行の『太陽』に、博文館が創業十二周年を記念して広く一般から募集した「明治十二傑」の結果が発表され、その中の「十二俳仙」をみると小波の人氣は7番目にあたります。さらに、

12人中、小波を含めて5人が石狩尚古社の選者でした。いかに石狩の俳句が盛んで、それを支える産物の鮭が豊富だったかが判ります。

巖谷小波

明治3年に医師であり書家である巖谷一六の三男として東京に生まれる。小波は親の勧めで医学の道を嫌い作家活動をした人で、早くから文才をあらわし文学結社「硯友社」の一員として小説を書く。同24年、20歳でお伽噺『こがね丸』が世間に認められたことから児童文学に専念し明治期最大の児童文学作家となる。叢書『日本昔噺』『日本お伽噺』その他で日本民話を定着させ、雑誌『少年世界』『幼年画報』などを主宰し創作童話を発表する。俳人としては、同23年に尾崎紅葉・川上眉山等と「紫吟社」を創設。漣山人・大江

小波・楽天居の別号をもち句集『さら波』がある。紅葉の『金色夜叉』の貫一は小波がモデルという。

参考文献

- 『新潮日本人名辞典』 1991年
- 『文壇ものしり帖』 巖谷大四 1986に拠る



巖谷 小波 後の川 巖谷の水々も 浮はしむ

生振に残る茅葺（かやぶき）屋根の家

吉田 隆義

明治27年4月15日（旧暦）に生振原野に開拓入植したのは、愛知県下16ヶ所、町村から56戸、320名が入植し開墾に従事する事となった。

生振に移住し、早速家を建てた。屋根は笹を刈って、屋根を葺き、外側を囲って入り口は、むしろを下げての生活ではあったが、入植3年から5年後ぐらいになってからは、茅葺を立てるのに、村民が1年がかりで、木を切り、材料を切り開いて、集めたのである。

まず、土台は、ガンテツを集めて、並べて、その上に木をノコでひきわって、釘は使わないで全部組み、三段に木を組み上げ、隙間にはシラカバの皮をひいて、水平にとり柱を立てた。家の中心になる柱は、ガンテツの1メートル50ぐらいの大きいのをを使って、基礎を作ったのである。

間取りは、玄関を入ったら土間があって、8畳間が2部屋と6畳間が2部屋と流し場は、土間の奥、便所は、別小屋に作ってあったのである。

茅葺の屋根は石狩川の縁から1年がかりでヨシを刈って集めておいてから、作り始めるのである。土台を作り、柱を立て、壁は竹を支えにして、ヨシを縦横に組み合わせ編み、縛り付けて仕上げて

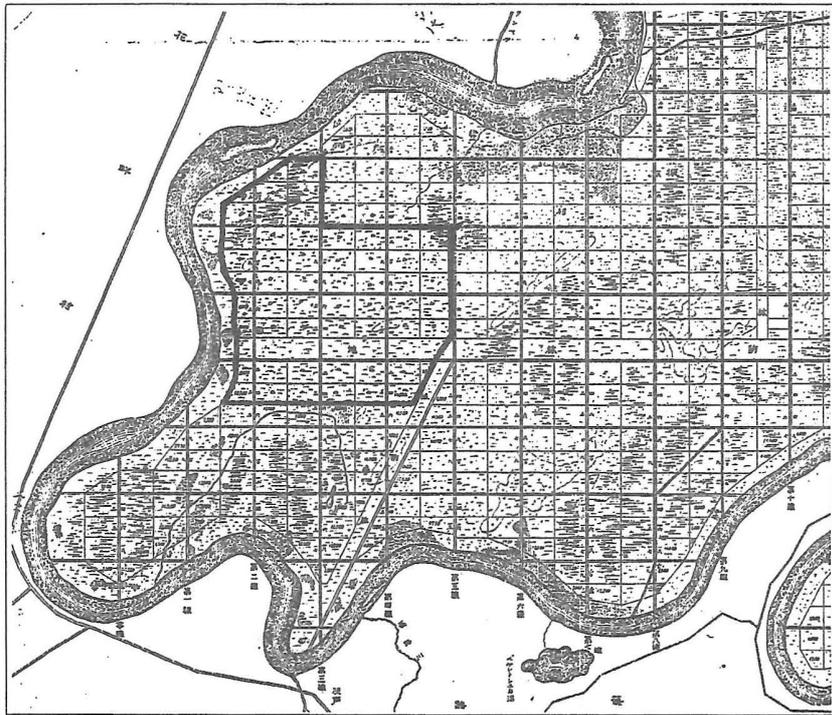
おいてから、土にわらを短く切って混ぜ合わせて、よく練ってから、壁塗りをして家の中を作り屋根は、木の太いのを縦に三角に組み、木は全部縄で、縛って木を組み合わせながら、ヨシで下の方から段々と並べて、厚さ50センチで、上の方に組み上げていくのである。

また、一人の経験豊かな長老大工さんが、屋根の周りを見ながら、ヨシを30センチぐらいの大きさの束にしたのを、下の方から竹で抑えて縄で縛って、ぐるぐると回りながら上の方にと重ねて、屋根を組み上げていくのである。ヨシは、細かい木を縄で縛って、組み上げていくのを、ただ目で見ながら、水平にぐるぐると回って積み重ねていくのである。

村民の人がお互いに協力し合って、1軒の家を建てたのに約1年かかったようです。

愛知県から入植当時の茅葺の家が、現在残っているのは、2軒しかなく、住んでいる人は誰もいないようです。

平成5年4月15日に愛知県団体開拓100年を迎える事になり1年前から記念誌の発刊に向けて協賛会を組織して、記念碑の設立と記念誌の発刊となったのであります。



第5図 明治27年愛知県団体が入殖した区域

石狩市右岸地域の農村電化設備の経緯

小川 茂

大正8年(1919)には、右岸地区八幡町までは、石狩川を鉄塔で渡して電気が点灯されていたが、農村地帯は、ランプ、安全灯、提灯、ローソクの生活であった。

当時、八ノ沢地区の日本石油磁業所では、八ノ沢変電所(注1)を設けて、当別町方面から送電を受け利用していた。

昭和17年(1942)初めに磁業所の電気を、高岡、五ノ沢、地蔵沢の各地区に電灯設備をもらうべく計画を立て、昭和18年(1943)1月27日に五ノ沢地区住民が、設立委員(注2)を選出し、北電の株主である厚田村大字聚富村の(故)島田米吉氏のお世話をいただき、点灯地域の実測と電灯施設の書類を作成し、申請したところ承認されたので、工事の世話も(故)島田米吉氏にお願いした。

その結果、昭和19年(1944)9月5日、丁度その日は、五ノ沢神社の祭典で、先に神社と学校に電気が点灯され各戸には9月12日に点灯された。

この工事期間中、工事請負者(氏名不明)数名は、五ノ沢の(故)山谷徳太郎氏宅に宿泊して作業をした。

(注1) 八ノ沢変電所は八ノ沢小学校近くにあつて、当時の責任

者は成田氏で当別町より通つて管理していたようです。

(注2) 設立委員(順不同)

(故)嘉屋徳光 (故)山谷徳太郎 (故)清水市蔵

(故)浦松三郎 (故)惣万基次 (故)岩本力松

これに引き続き、(故)島田米吉氏の協力を得て、同年中に地蔵沢地区から引野坂上までの高岡上台地区(一部を除く)全戸に点灯された。この時の高岡地区の世話役をしてくれたのは、(故)石崎久治氏・(故)長谷川松吉氏の両氏でした。

昭和20年(1945)大東亜戦争が厳しくなり、引き続いての工事が止むなく中止となった。同年7月15日、石狩町本町、八幡町、樽川などがアメリカ軍の空襲を受け、多大な人災と損害を受け、遂に8月20日終戦となった。私も招集(軍隊)されていたが無事帰宅することが出来た。落着いてから、再度、北電の株主である(故)島田米吉氏、高岡部落長(当時の町内会長)(故)石崎久治氏、(故)長谷川松吉氏両氏の協力を得て、高岡地区で一部残っていた学校地(高岡下台)14戸の工事を北電にお願いしたところ、許可が下りて、2年後の昭和22年(1947)9月20日14戸全部に電気が煌々と灯り、大変な喜びでした。奇しくもその日は高岡神社の祭典の夜でした。

この時、高岡入口から当別方面に行く道路の向い側にある北生振10線の(故)石井清一郎氏宅まで工事をした。

初めは、五ノ沢、地蔵沢、高岡と年次ごとに進められてきたが、戦争、敗戦と物資の無い大変困難な状況の世の中でしたが、幸いに

して、札幌市中央区南2条西5丁目大野電機商会KKに、内外線工事請負契約してもらい無事完了した。

工事請負料は学校他14戸と、北生振の石井宅までで、65,000円であったと思う。(暫く持っていた領収書を亡失したが、この金額で工事を完了したと記憶している。)

その後、農作業に便利な動力の取り付けを何人かに相談したが、誰も希望なく私だけが取り付けた。丁度1年後の昭和23年(1948)8月20日でした。動力の工事代金は5,900円で領収書は現在も保管している。

また、昭和23年(1948)には、北生振地域、美登位地域も電気工事が完了し、全戸が点灯した。この工事により、八幡町、北生振、美登位、石井清一郎氏宅も同一電流線となった。

参考

各地区の工事完了年度

昭和19年(1944)度 五ノ沢地区、高岡地区引野沢まで

昭和21年(1946)度 厚田村大学聚富地区

〔聚富村100年誌〕

昭和22年(1947)度 高岡学校地区

昭和23年(1948)度 北生振地区、美登位地区

以上、皆さんの御協力を得て、電気が点灯された経緯を元・責任者として後日のためしるしておく。

平成 7年8月20日 記
13年9月 補記

石狩町右岸地域の国、道の貸付牛導入の経緯

小川 茂

昭和25年(1950)7月、五ノ沢部落に北海道の貸付牛25

頭が入ったのが最初で、次いで、昭和38年(1963)度には国の制度をうけた北海道は石狩町から、国貸付牛(翌年生まれた雌子牛1頭を返還する制度)の申し込みを取った。町は右岸地区の五ノ沢、地蔵沢、高岡地区の畜産農家振興のため、42頭の必要性を認めて報告した。その結果、町は石狩町農業協同組合と打合わせをし、当時石狩町農業協同組合理事の小川茂と、獣医である石狩町農業共済組合参事(故)八峠恒作氏に導入牛の妊娠鑑定確認を依頼した。八峠氏と小川は、同年11月上旬、1週間位の日程で、日高町内の旅館に泊まり、占冠、沙流、富岡、平取、富川、新冠、振内、富内と各方面を車で廻り、各農家より購入予定の頭数(導入牛の30%)を買い付けをして、帰町し、石狩町へ報告した。後日、トラックで日高方面より2日間かけて石狩町の右岸地区へ運び、貸付け申し込みの各農家へ届けた。

また、購入不足分の牛は最先に導入した酪農家の返還分(雌子牛が生まれたら)を未貸付農家へ貸付し、これで未貸付農家への貸付牛は全部終了となった。

私の調査は、現在、町農業共済組合の天本秀明課長と同組合の元

総務課長氏家堅蔵氏、元課長高橋六郎氏及び石狩町役場経済部農政課各氏より聞きとりしたものである。

思いついて昔のことを調べると、なかには歳月が過ぎて分りにくい部分もあったがほぼ、高橋六郎氏の話で判ったように思うので、後日のため記しておく。

平成7年8月20日

元 石狩町農業協同組合理事

小川 茂

吉野 惣栄

はじめに

随分前になりますが、高瀬さんから、昔北海道をアイヌ語でなんと呼んでいたのかと、電話を貰いましたが、残念ながら即答できませんでした。それで、調べて後刻お電話致しますと、その場を取り繕いましたが返事をしないうちに高瀬さんから「ななかまど新聞」の切り抜き「オタペリの丘」の記事が送られてきました。

何彼につけて年寄は駄目だナとつくづく思い知らされました。

それでも折角調べたものを日の目も見せずボツにするのも惜しいので清書して次回に備えることにしました。

○蝦夷と北海道

蝦夷、古しえより国、群の称あらず、と永田方正先生は北海道蝦夷語地名解で述べています。

又アイヌ自ら称して“モシリ”という国、島の意なり、今は、北海道とは、北海道本島、及び、その附近の島嶼の総称であり、これが当り触りのない答だと思えます。

この地方は古来から、我が国の領土でありながら、その位置が北東に偏していたことと、間に潮の流れの速い津軽海峡があることで当時の丸木舟、板船、筏ではアイヌの先祖たる蝦夷の住地としなが

らも、容易に近づくことができな所となっていました。

「北海道志卷ノ一」では、北海道は渡島(ワタリシマ) 蝦夷の地なり、と、又大日本地名辞書では、北海道は山海藩模、我が大八州の辺裔(かたほとり) 辺地なるをもつて久しく棄地になっていた。と、いうのが維新以前の一般の認識でした。

夷人自呼して加伊、その地名も加伊、土人共互にカイノと呼び、女童のことをカイナー、男童をセカチー、又訛つてアイノと、近頃まで呼ばれていたそうです。

即ち、加伊は蝦夷をいい、北蝦夷道(ホツカイドウ)と同意なのです。

然しながら、それでは近世の北蝦夷(唐太)と、混乱する恐れがあり明治二年北海道と命名した折にもこうした意を充分に含めてのうえのことであったようです。

渡島(ワタリシマ)、これ津軽海峡を渡つて至る地であつて北海道の旧名であり、又の名を“越の渡り島”とも呼びました。

○道路

道路は蝦夷地に限らず、古来より海浜に多く、道をよく知るものは船楫を以つて隣郷に達すと、方言で之を搔送りという(櫂で水を搔いて船を進める)。

維新前後からの本道の旧道を函館から奥地へ順に拾ってみようと思えます。

地名の違うものは調べ得る限りにおいて、括弧で新名又は旧名を入れておくことにしました。

①札幌本道(一)

函館より亀田に至り海を左に見て西行し七重浜を過ぎ岐路を右折し久根別川を渡つて北行し一本木林、千代田林を過ぎ(現在の大野上磯線)を北上し、本郷林、一ノ瀬林を過ぎ峠下林に至つて現在の五号線と合流し、大沼トンネルを通り過ぎると小沼が見える。暫く小沼に沿つて東北行し、公園の北はずれで月見橋を渡り北に転ずると葦菜(じゅんさい)沼が木々の間に見える。ここらあたりを横川という。ここで又五号線と合流し、今度は駒ヶ岳を右に見ながら下り坂道を気持よく歩き赤井川、逆川を過ぎ宿野辺に至り左折して西行し姫川で右折、浜に出るとそこが森林である。これより海里二十五里五分胆振国室蘭に至る。

今の元室蘭(崎守町あたり)蝦夷地にきた風情となる。旧名砥刈牟伊という(又砥刈向ともいう)。北緯四十二度十九分三十一秒、東経百四十度五十八分五秒、水深約九メートル、港口西に向い、海底極めて錨の爪掛りよく四時風浪の害なし、明治五年十月、森林との間に蒸気船を配す。道路も度重なる補修により馬車道となる(今の三十七号線)。イタンキ浜で左折して三十六号線に連なる。

この地より鷺別を経て、幌別、蘭法華、登別、阿寄(あしよろ)(虎杖浜、アシヨロ海岸等としてその名を止める)、敷生林(竹浦橋の掛かるのが敷生川である。地名でなくこも川の名として残る)、敷生、白老の二川を経て白老コタンに至る。六里三十町二十四間。社台、もん別、樽前、覚生(おぼっふ)(今の社台と錦岡の間ころ)、錦多峰(いずれも川の名として残り地名は錦岡と変る)、小糸魚、この

間旧道は海辺に、新道は山側に掘る。距離それほど異ならず、岐路は苔小牧にあり五里二十一町五十一間これより北折し国道三十六号線珍苗(うとない)沼の西を樽前台地の裾を巻き美々植苗、美沢と美々川に沿うごとく六里十四間、現在の三十六号線を北上、千歳に至る。ここより長都別川、漁村を経て三里三十四町島松に至る。ここにて石狩国札幌本道に合流し、これより厚別、月寒、豊平を経て五里二十七町四十五間札幌に至る。

つづく

石狩浜漁師天気予報あれこれ

吉岡 玉吉

はじめに

昔は、ラジオなどの報道機関の天気通報は天気情報（あることがらを確実なものとして知らせる。密度が高い）と言わず、天気予報（あらかじめ、告げ知らせる。充分でない）と呼称し、例えば、風の吹く予報を「木の太枝を動かす程度」などと現象を想定して報じていた。

今日では空に人工衛星が飛び、短期情報から長期情報まで即座に知ることが出来る。海を相手にする漁師はこの情報に従って操業すればよい。砂丘に立って日和見しなくても「ようし、出るぞ」と一声で進化した磯舟（動力船）や漁具で出漁することが出来るようになった。

昭和二〇年（一九四五年）以前の漁師はこの気象に左右され「板子一枚下は地獄」などといひながら漁労に励んだものである。

漁師の気象予報については、その地方、その浜によって相違するものもある。石狩浜で漁労するに当たって、経験の上に体得され伝えられた自然現象に対する英知が過去のものになろうとしている。

そんな思いから、先達者からの言い伝え、また経験した気象予報の方法、風の呼び方等を記憶を辿って記述する。

☆石狩浜の風向、風位の概要

明治、大正、昭和の中期頃までは、それぞれの漁師が朝夕、浜の砂丘【注・浜の砂丘。出雲さん《出雲社》の山、禅寺《曹源寺》の山、金毘羅さん《法性寺》の山】に登って日和見し、各家々に備えつけたバロメーター（気圧晴雨計）を見比べながら、それぞれの経験を予想して出漁や浜仕事をしたものである。石狩浜のヤマセは石狩川が真向い（南東く北西）に流れているように、平野部をさえぎるものなく、川なりに一文字に吹き、出し風となつて強く吹くのが特徴である。

晩春から初秋にかけての夏季はヤマセ（南東）系の弱い風が吹き、日中にアイ（北）風に変つて晴天が続く。一般にはこの風をアイノカゼと呼称していた。

石狩浜や厚田浜では、浜側から吹く風をオキカゼ、南方向から吹く風をヤマセ又は出し風（下り風）、東方向から吹く風をシモヤマセと呼んでいる。

下り系がオキカゼ系になるときは一時的に無風状態となつて變つて行き急激に吹く場合と、緩やかに吹いてくる場合とがある。急に強く吹いて来る時は時化が大きい。

オキカゼ系は、ヒカタ（西）からタマカゼ（北西）、アイ（北）廻りと変る。また、その時の気圧の変化によつて反対方向から變る場合もある。ヒカタ方向からアイ方向に變つて行く時は風になる前兆である。

気象観測（レーダー）の発達によつて、日本上空五〇〇〇メートル

ル以上は常に西風が吹いていることが確認された。(昭和中期、既に観測され、かつての陸軍がアメリカ本土にこの西風を利用して風船爆弾を飛ばせた記録がある。)

☆風の呼び名(石狩浜、厚田浜)

○オキカゼ系(北寄りから西寄りまでの総称)

・ヒカタ。主として西風。

西を中心に南西から西北西にかけて晩秋から冬にかけて最も強く吹く風。

地方(亀田郡恵山町『尻岸内』)では南西風をいう。八月から翌年の四月ころまで吹く強い風でシカタとも発音する。この地方では海難事故が最も多いという。

松山地方の知内、小谷石周辺では石狩浜と同様の南西から西北、西風をヒカタと呼んでいる。古語。ひかた(日方)日のある方向から吹く風(万葉集)。

関連方言として、ヒカタ、日本海沿岸一帯に分布し、その土地によって南西から西、北西または南東と風向がことなっている。

・ヒカタヤマセ。

南西の風。

・ニシヒカタ。

西南西の風。ヤマセからヒカタに変るとき吹く風。地域によっては南西の風のこともある。関連方言として、青森県の下北、東津軽、西津軽、北津軽、岩手県の九戸地方にあり、この方面から

の移入風向。

・ホンニシ。単にニシともいう。

真西から吹く風。オキカゼともいう。

・ミナミヒカタ。

南西の風。ミナミシカタとも発音する。

松山地方の知内、小谷石周辺でも呼称するが、石狩浜でも手稲山系方向から吹く風を呼んでいる。

関連方言として岩手県下閉伊郡地方にあり。

・イレカゼ。

ヤマセ系(ヤマセ)からオキカゼ系(アイ)に変るときの風の呼称。中川郡豊頃町大津周辺では南南東の風をいうが、石狩浜や厚田浜では春から夏にかけて風向が変わって(アイノカゼ)弱く吹く風をいう。

・ニシタマカゼ。またはタマカゼという。

西北西風、西風、北西風をその地方によって呼称するが、石狩浜や厚田浜では北西風を呼び、単にタバカゼ又はタマカゼと呼ぶ。

石狩湾では一層強く吹き最大の時化となる。

青森県周辺では、

・ニシタバカゼ

西北西風 青森県下北地方

北西風 岩手県九戸地方

西風 青森県西津軽地方

・ニシタマカゼ

西北西風 青森県東津軽、北津軽地方

北西風 青森県東津軽、下北地方

北北西風 青森県下北地方

とそれぞれその地域によつて呼び名が違つている。

・アイノカゼ。

石狩浜では春から夏にかけて快晴でそよそよと吹く北風。

地方によつては北東風、主として北寄りの風。土地によつて北東もあれば北西の風をもうが、地形から推(お)すと常に海岸線に直角に沖から吹く風をいう。ところによつては、アイカゼ、アイ、アユ、アユノカゼなどともいう。

関連方言として日本海側は津軽(青森)から北陸、山陰全域にわたつて最もよく知られた風名である。太平洋側にも所々にあり愛知県知多群(伊勢湾)地方にあり太平洋では珍しいと言われている。

・タンバ。

北西の風。タバカゼの転訛名(てんかめい)。

・アイタマカゼ。

北西北の風。ヒカタからタマカゼに廻るときに吹く。

・スツツモン(寿都門)。スツツモン系と呼称する。

西風。石狩湾の沖合いで吹いているが、陸にはどんよりと曇り、風がないが波が高く打ち寄せ、やがてヒカタが強くなつてくる。

○ヤマセ系

・ヤマセ。

南東の風(石狩浜ではもつとも多い風)。

石狩浜や厚田浜では東寄りの風(シモヤマセ系)は間々吹くが少なく南寄りから南東方向の風をヤマセと呼称している。

函館周辺 東風、または北東風。

桧山管内 知内、小谷石では南東の風をヤマセという。

道南ではヤマセとも発音している。この風は本来、山を背にして吹く風。日本海岸では東寄りの風のことである。海は時化する。本州ではヤマセのほかヤマゼ、ヤマデとも呼んでいる。

氣象に關係はないが、女のヒステリーのことを「隣のカツチャ(主婦、母親)ヤマセ吹いているでや」などという。

関連方言名詞

東風 青森県

北東風 岩手県、山形県、新潟県

南東風 石川県、岩手県

・クダリ。

南東の風(ヤマセと呼称する)。

・クダリヤマセ。

南東の風の異名。

・ミナミヤマセ。

道内各地、南南東の風。石狩浜では石狩川に沿つて吹いてくる。天氣が良く強く吹いているがやがて曇り、後に雨となる。天候は下り坂となる。

・ミナミクダリ。

南東南の風。石狩浜ではヤマセの部類で消化している。

函館地方ではよく吹く風という。

関連方言として青森県東津軽郡地方にある。

・カミカゼ。

南風。上(江戸方面)の方向より吹いてくるところからの名詞。

・ミナミ。

南風。石狩浜ではカミカゼ、ミナミという人も間々いるが総じてクダリと呼称していた。

・ダシカゼ。

南から東(ヤマセ系)寄りの風の総称。

○シモヤマセ系。

・アラシ(強く吹くときもアラシという。総ての風向)。

東風の弱く吹く風。春から夏にかけて夜明けごろからそよそよと吹く。朝日が上ると変化する。クダリ寄りになる場合が多い。

・ケアラシ。

風位風向ではないが、海水と空気の湿度差によって水蒸気が大量に発生すること。船の航行に支障をきたすことがある。

早春、晩秋に多い。

・アイシモカゼ。

東北北の風。

アイ廻りの時に吹く程度。石狩浜では、まれ。厚田浜では増毛連山からの吹きおろしなどがあり間々吹くことがある。

・シモカゼ。

東北の風。函館方面では北東、東北東、北風をいう。

石狩浜では夏、アイに廻る時、吹く程度。

・シモゲ。

東北寄りの風。増毛連山方向から吹きおろす風。石狩浜では少ない。

下(東)から吹く風の総称。

北風。北北東風、北東から吹く風でゆるんで風になってくるといふ。渡島管内南茅部町。関連方言として青森県北津軽地方に多い。

北北東風 佐渡地方

・シモヤマセ。

東北東の風。

石狩浜では少ない。厚田浜では増毛連山から吹きおろす風で強弱があるが強風にはならない。

・ホンヤマセ。

東風。

石狩浜では夏、日の出ころに弱く吹き、日が昇るに従って南寄り(クダリ)方向に変わっていく風。冬期間は稀。

☆自然現象から見る気象予測

○波打ち際の砂がぬかるようになると時化になる。

砂浜の波打ち際が、部分的にぬかるみ(液化化状態)になること。波の引いた後、濡れ砂の上を歩いて見る。もし砂が堅く締つ

ていると波は大きくならず風の前兆。砂の面がずぶずぶぬかる様
になつていると次第に波が高くなり沖合いはずでにオキカゼ系の
風が吹いており、やがて浜も時化てくる。

○鰈(かれい)や磯魚(いそざかな)が沖へ退けると時化する。

鰈類や陸に近い浅瀬に生息する魚が、時に沖合いに行つてしま
う。こんな現象のときは大時化が来る。

初秋から晩秋に多い。間々早春にもある。これは小手繰り網漁や
建網漁などで見られる。

○ホッキ貝が砂を食うと時化になる。

ホッキ巻漁をしていると獲れたホッキ貝に沢山の砂が入つてい
ることがある。これは時化に近いことを知つてホッキ貝が海底深
く這入るためである。

(底潮が早く流れるからでないか)。「底潮だ」という。

○「下鳴り」は南東風(ヤマセ)の知らせ。

(石狩浜で南東の方向から普段聞えない音がすること)。

八の沢の石油砒のガソリンカーの音がことさらに大きく聞えたり、
札沼線(現学園都市線)の音が微かに(普段は聞えない)聞える
ことを「下鳴り」という。

こういう時はやがてヤマセが強くなり石狩湾は「出し風」の時
化となる。

注・昭和十年代のヤマセ系風による遭難事故。

・昭和十一年五月(一九三六年)厚田村の小型運搬船(金毘羅丸)
は夜半小樽港を出港、途上、出し風(ヤマセ)が強くなったた

め岸寄り航行を会得して、オタネハマ沖合いまで来たがなお強
風が続き転覆、乗組員救助。

・昭和十六年四月(一九四一年)石狩港から厚田村に鯨刺し網漁
の廻り船(磯舟)が強風(ヤマセ)のため帆走不能となり漂流、
浜益村送毛(おくりげ)まで流される。

○星が輝くと寒さが強くなる。

冬期空気が澄み、星が輝く夜は寒さが強く朝方は石狩浜ではマ
イナス二十度以下にもなった。朝の挨拶は「おはよう」ではなく
「シバレルな」であつた。

○星の光が強く見えると風が強く吹く。

夜空の星が強くうるんだ様に光を放つてまたたくと、次の日は
風が強くと化てくる。石狩浜でヤマセが強い。

○朝日がこがれると天気は下り坂、雨になる。

「朝焼け」。

「夕焼けは晴」。

○朝焼けは晴、後雨(朝てっかりは曇、浜かせ午後から雨)。

春 入日がこがれると天気はぐずれやがて雨となる。

夏 夕焼け翌日晴れるが風が吹く。

○朝、手稲山に雲がかかり始めると、昼頃から弱いヤマセで雨が降
る。

○朝、手稲連山が近く見える(はっきり見える)とヤマセが強くと吹
き天気は下り坂。

○朝雨が降つていて手稲連山が開けて見えてくると雨が上がる前兆。

○朝、手稲連山がぼやけ、増毛連山が良く見え、愛冠、雄冬岬方向が明るく見えると、昼ごろからアイノカゼが吹き天氣が続く（特に春五月ころから夏にかけて）。

○ヤマセが二日続いてかわせ（風の方向が変ること）てヒカタになると、タマカゼなどに変つて二、三日続くことがある。

○近星は時化の近い知らせ。

夜空で月のすぐそばに星があるのを近星という。近星が出たらその距離によつて近々中に時化てくる。月に近い程時化が大きくなる。

○綿雲は、雨の晴れる雲。

綿雲というのは綿を拵えた様にふんわりしたやわらかな感じがする、ふくれ盛り重なつたような雲で雨降りの時、どこかにこの雲が湧き出て来たら間もなく雨は上がる。

○スツモンケ（寿都者気）は、やがて西風（ヒカタ）が吹き時化になる。

風がなく無風状態なのに高い波が打ち寄せている。これは石狩湾から大灘（だいなん）に強いヒカタが吹き荒れウネリが湾内に入り高波となつて渚に打ち寄せ、やがてヒカタの時化となる。早春、晩秋に多い。

注・大灘。

山の見えなくなる沖合い、漁労の限界線より沖。漁船は山を目標に自船の位置を知り、漁場の所在を記憶して操業したことから生れた名詞。

○オヤク（太陽の暈（かさ））で天氣を識別する。

・太陽にオヤクがかかったら翌日は雨。

・月にオヤクがかかると、ヤマセが吹き雨が降つて荒れる。

・オヤクには「時化オヤク」と「凧オヤク」とがある。

・「凧オヤク」は太陽や月の廻りに完全に円を描いているもので、大して心配はない。「時化オヤク」は円いオヤクのどこかに切れ目（視力検査の輪のように）がありぼやけている。このオヤクが出来ると翌日は風が強い。そして風はオヤクの切れ目の方向から吹いていくという。

○波頭に兔（うさぎ）が飛ぶ。

特に夏海で呼称する。五、六メートル前後の風が吹き波頭に白波が立つ。この様子が兔が跳ねているように見えるところから「兔が飛ぶ」と表現し、機帆船等の航海日和となつている。

○「長折り」。

沖合いで一〇メートル以上の強風が吹き、ウネリの波頭に白波が立つ。大きいほど船の航海には危険。暴風雨雪時には船を波に立てて斗う（磯の波のように折つてくるので極めて危険）。

○風の variability 。

「風の variability」とは、風向が変化することをいう。冬は「風の変りばな」はなく、一時無風状態になる。石狩浜では変りばなはヒカタが多く、突風の如く強く吹く。夏は弱いヤマセが朝方から昼頃まで吹き、アイノカゼに変わる。無風状態から微風、弱風と変化し、心良く晴れ海水浴日和となる。

○動物の仕草による気象の見分け方。

・ゴメ(カモメ)が高く飛ぶようになると時化の前兆。

「ゴメの高上りという」。

海面で泳いでいるゴメが高く飛び始めると時化になり、高く飛んでいると時化が続く。それ故に「ゴメの高上がりヤトイ(漁夫)の高枕」「ヤトイの高枕」と鯨場ではヤン衆が喜んだもの(漁夫の休日の意味)。

・猫が腹を出して昼寝すると、雨が上がる。

・猫が前足で顔を洗う格好をすると、晴れる。

・すずめが水浴びをすると、雨が上がる。

・夏、カラスが水浴びすると、二、三日中に雨が降る。

・魚が水面に躍ると雨が近い。但し、ボラは違う。

・つばめが高く飛ぶと雨、低く飛ぶと晴。

・秋、トンボが群をなして高く飛ぶと、ヤマセが強くなり明日は雨。

○「アイの朝風、クダリの夜風」。

夏、アイノカゼ(北寄りの風)はいくら吹いていても朝方になれば風る。クダリ(南寄りの風)は日中いくら吹いていても夜半には風る、の意である。

○「夏のヒカタ」と「女の腕まくり」や、「女のねじり鉢巻」は大したことがない。

そんなに吹かないの意。

○「女の腕まくり」と「クダリのおとしばな(風の吹き始めのころ)

は恐れるな」。

少しも恐れることはないから出漁せよとの意。

(厚田浜の鯨場「刺し網漁」でよく言われて出漁していた)。

○「ヒカタ(西風)と出面取り(日雇、日給労働者)は目一杯」。

ヒカタは、朝から夕方まで一日一杯吹き続けるので、出面取りも休まず日一杯、働かねばならない。ヒカタと出面取りは同じだ、との意。

○「あの雲ゆきではヤマセはドヤスぞ」。

夕方、日を見をして地上ではヤマセが吹いているのに西風の雲ゆき(雲の流れ)を見て「あの雲行きでは夜になると、ヤマセはドヤスぞ」と予報した。

注・ドヤス。風がやむの意。

どづく。なぐるの方言で埼玉県中部、西日本地方にある。

石狩浜での意味は風がやむ、との意でどづく、なぐるの意には用いていない。

○クダリの吹く前に、干潮時でもないのに引き潮のようになる。

この現象を「潮が涸れる」という。

吹き出して来ると潮込みとなる。石狩湾の岬(愛冠)に近いところ、特に厚田浜に顕著である。

○「波の花」は時化の最高潮に発生する。

「波の花」の出始めるのはタマカゼなど最高に吹き始めるころで、花の色が段々白から茶色がかってくるに従って風てくる。

注・「波の花」。

白波を花にたとえていう語で、風浪荒れ狂う時、渚の岩や砂礫に激突して泡状になって舞い上がる飛沫（しぶき）。

○海の雷。

石狩浜では砂州で見られないが、厚田浜の「ガンケ」（崖）のある海岸で、渚が石原（いしわら）（原（わら））。接尾語で原、群を表す）になっているところで大時化の際、波が寄せたり返したりする時、波の力で石が転がる。この時出る音がガンケにこだましてゴロゴロ、ガラガラと響き渡る。時化が大きい程こだまする。子供らは雷だといって浜に寄りつかなかった。

（青島の浜、小谷の浜、ポンビラの浜《厚田浜の地域の名称》など）。

○石狩浜周辺の潮の流れ。

海は常に干満潮によって左右され、沿岸線に沿って流れている。

湾（石狩湾）の場合は流れが早く特に岬は数倍に流れる。

・小樽潮（下り潮）。

南西から北東方向に流れる（銭函方向から厚田方向）。厚田浜では石狩潮という。

・アイ潮（上り潮）。

北東方向から南西方向に流れる（厚田方向から銭函方向）。

注・いずれも干潮満潮に左右されるが、時速毎時、一キロ二キロ前後。

・石狩川の流れ状況。

河水（淡水）は鹹水（かんすい）より軽いため、上水が走る

程度で潮流にはさほど影響はない。春季の増水期に厚田沖から雄冬岬方向まで河水が走っているが上水程度である。

・アイ突込み潮。

北または北西方向から海岸に向って流れる潮廻り（時間は短く、少ない）。

・アイ払い潮。

海岸方向から沖合い方向に流れる潮。突込み潮の反対。地形、場所によって一様でない。

石狩浜の潮の流れは、石狩湾の最深部であるため、アイ潮、石狩潮共平均して流れる（アイ潮は午後から多い）。

・瀬の状況。

注・瀬とは、川などの浅くて徒歩で渡れるところをいうが、石

狩浜は砂底であり、時化時の波と潮の流れによって出来る浅瀬。

海岸では波の強弱によって、突込み潮と払い潮が発生し、突込み潮と波によって砂が移動し浅瀬が出来、払い潮によって深間が出来。この流れによって、一の瀬、二の瀬、三の瀬まで見ることが出来る。

瀬の長さは七・八〇メートルから一〇〇メートル、その間に七・八〇メートルから一〇〇メートルの深間（払い潮の流れるところ）が出来。瀬の間隔は沖合いに向って五、六〇メートルである。

瀬は時化の大小によって規模が異なる。

瀬の呼称は沖合いに向つて三の瀬、二の瀬、一の瀬と呼ぶ。

瀬の見分け方は、波のあるとき渚に立つて、波のおり方を見ると一目で分る。波頭が白浪でおつているところが瀬、同じ位の位置で白浪が立っていないところが深間である（ここは流れが早い。遊泳禁）。

・二重潮。

上下層水の流れの向きが、全く逆であるか、著しく異なっている場合を二重潮という。一般に湾口域、大河の河口、海峡、潮境域などに発生する。石狩川河口周辺で発生が見られる。

時化のとき海水の上に河水が重なり、強い力が生じ大きな波と化す状態。

・三角波。

石狩川河口周辺で川の流れと潮の流れとがぶつかり、また、磯波と川の流れが衝突したときに起る波。この場合急に盛り上がり極めて危険（反射波『海』、進行波『川』）。

以上

引用文献

○『ニシン漁労』

編纂 北海道教育委員会

昭和四五年三月三〇日発行。

○『イシカリと風』

著者 田中 實

いしかり暦 第十五号

平成十四年三月二十九日 印刷
平成十四年三月三十日 発行
発行者 石狩市郷土研究会